Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2020, Vol.29, 207-216

報告

大学における生活科教育の授業の実践と課題についての一考察

－2019（令和元）年度・前期の講義と模擬授業を振り返って－

山 口 幸 彦［鹿児島大学教育学系（教職大学院）］

A study of implementing life environment studies classes at university and the issues that this gives rise to: Reflecting on lectures and trial lessons in the first half of the first academic year of the Reiwa Era

YAMAGUCHI Yukihiko

キーワード：生活科教育、目標・内容、評価、模擬授業、学習指導案

1. はじめに

1990（平成 2 年）年から移行期，1992（平成 4 年）年にスタートした新教科，生活科。筆者はその創設当時，鹿児島大学教育学部附属小学校（以下，附属小）に勤務しており，その新しい教科の立ち上げにかかわった。あれから，本年度で 30 年になり，おりしも元号が平成から令和に変わった。

小学校教諭としての公立学校での経験を活かして，現在同大学院教育学研究科の指導に当たりながら，学部の生活科教育の授業を本年度から専任として担当している。これまで附属小での教育実習指導等を通して学生とのかかわりはあったが，直接学部の学生を単独で指導するのは初めての経験であり，どきどきしながらこの 4 か月を過ごした。

講義の内容を構想するに当たり，様々な先行事例や先輩教員の指導を仰いでスタートしたが，机上で考えるのといざ学生と対応するのは大きな違いがあり，毎回反省することばかりであった。長年経験してきた小学校 1･2 年生への生活科の指導とはまったく異なり，大学生に生活科の何たるかを伝える授業づくりとその実践は，なかなか思うようには進まなかった。また，その難しさとともに重要性を学生との直接的なやり取りやレポート・アンケート結果から実感した。

本稿は，2019 年度・前期約 4 か月間に実践した筆者による生活科教育を振り返り，15 時間の授業後に実施した manaba（鹿児島大学学習管理システム）による学生へのアンケート調査の結果を分析・省察して，後期の授業に生かすとともに，創設時からこれまでの鹿児島大学教育学部で先輩諸氏が取り組まれて来られた生活科教育の授業の取組についての情報整理を試みたものである。

2. 大学における生活科教育の先行実践と最近の実践について

生活科教育の設立当時から先導的な実践を積み重ねてきている木村（2005）は，初期の生活科教育の実践を試みて，「一昨年度の反省から，学生に模擬授業を行わせるのは，この人数と時間数では無理と判断した。それでも，なんとか現場の実態をよりリアルに理解してほしいと考え，提案した

のが 2 回の授業参観であった。」[1] と，模擬授業より現職の教員の行う授業参観が効果的ではないかと指摘し，附属小と一般の公立校 2 校の授業参観を実践し，その効果と課題について報告している。しかし，文部科学省の「教育課程コア・カリキュラム」が求めている模擬授業を実施することが必須と考え，今回の実践ではその模擬授業にチャレンジしてみることにした。

また，生活科の新設当時に実践者として活躍した野田（2019）は,「最近の生活科授業を参観すると，板書やカードにかかれた内容を一斉に読み上げることで始まる授業が散見される。『見通しを持たせる』ことを重視するあまりの弊害であると思う。」[2]と子供の思いや願いを丁寧に引き出すことをもっと大切にしていた生活科設立当時のことを振り返っている。生活科の支援は「ゆっくり」「たっぷり」「じっくり」と取り組むことと考えてきた筆者も同様の意見を持っている。「～したい」という思いや願いをもっと丁寧に引き出すことにエネルギーを注ぐ生活科の在り方を改めて考えてみたいものである。そこで，今回の大学の授業実践においても，生活科が子供中心のボトムアップの教科であることを丁寧に理解させるようにしたい。

3. 鹿児島大学教育学部における生活科教育の講義の変遷

3.1. 1991 年（平成 3 年）　生活科教育の講義スタート

小柳・八田（2013）によると「大学の教員養成課程において「生活科」の教職専門科目の講義が本格的に始まったのは 1991（平成 3 年）年度からである」[3]。当時，筆者は附属小でまさに生活科の実践を担当しており,研究公開や教育実習等を通して,これらの先生方から指導を受けてきた。

同じく両氏は当時を振り返って,「当時のことで思い出されるのは,附属小学校の研究公開のとき,生活科の公開授業とそのあとの分科会だけは，参加者があまりにも多いために，体育館を会場にしておこなったことである。それも今は昔の話である。」と述べている。まさにその渦中にいて新しい教科への関心の高さに驚いたことをよく記憶している。あれから 30 年経過したのだ。

3.2. オムニバスによる生活科教育の授業のスタート

生活科の新設により小学校では 1990（平成 2 年）年から移行期として先行実施されることとなるが，大学でも素早い対応がなされ，1991（平成 3 年）年からの生活科教育の講義が始まっている。当時，4 人の教員によるいわゆるオムニバスによる授業がなされていた。1996 年に鹿児島大学に赴任し，生活科教育にかかわった溝口和宏（現鹿児島大学）によると,「当時４人体制で指導がなされていた。この体制は科目創立当時からで，教員 A（教育学系）:生活科新設に関わる中央審議会の議論等について，教員 B（心理学系）:子供の発達と自己認識等について，教員 C（社会科系）:小学校低学年社会科と生活科における社会的事象の扱いの違いについて，教員 D（理科系）:小学校低学年理科と生活科における自然事象の扱いの違いについて等を担当していた。」とし「意識して，どのような実践が求められているかについて講義していた」という。それぞれの教員が専門を踏まえながら，生活科における教科横断的な学びの意義と可能性について追究してきたものと考えられる。

その後，2000（平成 12 年）年から，家庭・家族に関わる領域を担当する家庭科系の教員が加わり，5 人体制での授業が担当者が変更されながらも長い間実践されてきている。

3.3. 大学の教員による生活科教育のテキストの作成

2013（平成 25 年）年 3 月には，生活科の指導に携わってきた鹿児島大学の教員を中心に生活科・総合的学習の授業テキストとして小柳正司・八田明夫編著による「生活科・総合的学習の新展開～「生きる力」を育むために～」（あいり出版）が鹿児島大学はじめ多くの教員の共同執筆により刊行され，それぞれの担当教員が講義の中で活用してきている。それは下記のような内容で構成されている。

⑴　生活科はなぜ誕生したか　⑵　総合的学習の系譜と生活科教育　⑶　教科としての生活科の特質　⑷　教科としての生活科　⑸　社会とのかかわりを深める生活科授業　⑹　生活科における自然認識の発達　⑺　家庭と地域生活を教材化する　⑻　自己理解の育成　⑼　総合的学習の現状と課題　⑽　表現活動を中心に据えた新たな総合学習の可能性　⑾　学校教育における地域高齢者の現状課題の理解　（補）　生活科・総合的学習を支える教育思想　（目次より引用）

これらの内容は，生活科にかかる様々な情報がそれぞれの研究者の専門的立場からコンパクトに整理されており，大学における生活科教育の基礎的・基本的内容として，授業によりさらに具体的な説明が加えられ，活用されてきたものと推察される。

3.4.　専任教員による 15 時間の生活科教育の授業

2016（平成 28 年）年度からは，生活科教育の専任教員が 1 人で 15 時間の授業をフル担当することになる。大学から専任教員に依頼された松崎康弘（現　鹿児島女子短期大学）によると，「それまでオムニバスで一部の講義を担当していたことと短大でも同じ科目の担当していたことから，全時間の担当をすることになった」という。松崎は，鹿児島県生活科・総合的学習教育連絡協議会の会員として一緒に研究してきた筆者の研究仲間でもあり，それまでも頻繁に情報交換の機会はあったが,鹿児島大学における講義について語るようになったのは平成 27 年度に筆者が大学に勤務するようになってからである。2016（平成 28 年）年に着任後，無理を言って松崎の講義を拝聴させていただき，その授業後にあれこれと語ったことを思い出す。「もっとこうしたい」「もっとこうありたい」という話も，「もう 1 時間，担当する生活科の時間があれば…」「1 講義の人数がせめて 50 人くらいであれば…」というすぐには変えられない話で終わっていた。模擬授業の実践についても，「100 名を超える現在の学級編成ではきびしいのでは」という意見も聞いていた。

3.5. 2017（平成 29 年）年度～2018（平成 30 年）年度の 2 年間　生活科教育の授業参観をして

筆者は，授業担当の松崎の好意によりその生活科教育の授業を参観する機会を得た。しかも，後半の 14 時間目には「創成期の生活科」と題して，現職時代から行政・管理職時代を通しての生活科教育観を学生に話す機会をもらった。この経験はのちにその松崎に引き続き，授業を担当することになった時，とても大きな経験となった。

特別に時間設定をしていただいた 14 時間目の「創成期の生活科」の内容は，「こんな子供に出会いました」「心に残る生活科のキーワード」「生活科はなぜ設置されたか」「生活科の目標の比較（平成元年と平成 29 年)」「新しいものをつくる喜びと苦しさ」「皆さんへの期待」などであった。

約 50 分間,附属小に在職中に携わった生活科の研究の中で出会った子供たちの活動の様子や行政

時代の授業研究の経験を学生に紹介した。生活科の実践経験者が実際に出会った子供たちのことを紹介することにより，より具体的なイメージを持つことができたのではないかと考える。

4.　2019（令和元）年度・前期の生活科教育の授業の取組

生活科教育の担当を打診されて，さっそくシラバスの作成に取り掛かった。これまでの実施事例があるものの，今回の課程認定では「模擬授業」を入れることが必須ということが示され，どのようにすればいいか検討を重ねた。その結果，下記のような授業計画を立て，実践に臨んだ。

4.1.　授業のねらいと具体的な到達目標

この授業は，生活科における教科目標・学年目標や育成を目指す資質・能力について理解するとともに，学習指導要領に示された学習内容・指導方法・評価等について，教科の誕生の歴史や子供の発達特性等を踏まえて理解することを目標とする。また，具体的な授業場面を想定した活動や体験の実習，学習指導案の作成や模擬授業を通して，授業設計の方法について理解を深めることもねらっている。さらに，幼児教育との連続や各教科・総合的な学習の時間との関係についても理解することを目指す。

具体的には，次の２つの到達目標を達成することを目指している。

◇　小学校学習指導要領に示された生活科の目標や内容を理解する。（細項目は略）

◇　生活科にかかわる基礎的な学習指導理論を理解し，具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける。（細項目は略）

4.2. 授業の概要

1992（平成４年）年から新設された小学校１・２年が学ぶ教科・生活科について，具体的な体験活動，テキストや資料等の読み合わせ，具体的な実践事例の紹介等を通して，その目標・内容・具体的な子供の活動等を学習指導要領に示す個別の内容に即して解説する。また，内容に応じて幼児教育とのかかわりや各教科・総合的な学習の時間との関係についても解説する。さらに，実際に生活科の活動を想定して学習指導案として授業設計したり，相互に模擬授業を参観し合ったりして，学生が能動的・協働的に参加する授業とする。

4.3. 15 時間の授業計画

①：生活科の誕生の経緯・変遷と新しい生活科の目標（オリエンテーション）

②：生活科の内容構成の考え方と全体構成

③：「学校と生活」「家庭と生活」に関わる活動とその実践事例

④：「地域と生活」「公共物や公共施設の利用」に関わる活動とその実践事例

⑤：「季節の変化と生活」「自然や物を使った遊び」に関わる活動とその実践事例

⑥：「動植物の飼育・栽培」「生活や出来事の伝え合い」に関わる活動とその実践事例

⑦：「自分の成長」に関わる活動とその実践事例

⑧：子供の実態を踏まえた生活科の評価の在り方区

⑨：生活科の学習指導案の作成と改善　　⑩：模擬授業と授業研究１：内容①～③

⑪：模擬授業と授業研究２：内容④～⑥　⑫：模擬授業と授業研究３：内容⑦～⑨

⑬：模擬授業の振り返りと指導計画の作成

⑭：幼児教育や総合的な学習の時間との関係　⑮：今後の研究の動向（総括）

4.4. 授業実践の概要と省察

4.4.1. 4 月 9 日　①　生活科教育の概要とオリエンテーション

117 名の登録した学生と第 1 講義棟 103 号室で初めての対面，緊張はしなかったが，筆者の話が長いために学生はたいくつしたようだ。具体的な実践の写真をもとに語ったところは，顔をあげて聞いていた。メモを取る学生は少なく，ただ聞いているだけの学生が多かった。プレゼンの精選をしてポイントを箇条書きするようにさせたい。情報交換の時間「ワイワイタイム」を 2 回実施したが，次からは 4 回程度は計画したい。動画「Society5.0」を見た学生が少なかったことには驚いた。

4.4.2. 4 月 16 日　②　生活科の目標についての理解

前回 3 人，今回 2 人の自主的な発表があった。だんだん増えてくれればと思う。「ワイワイタイム」を 4 回にした。課題がむずかしかったのか，あまり活発に意見は出なかった。目標・内容についてたくさんの情報を示したが，もう少し整理して示す必要がある。出席確認もかねて，初めてのミニレポートを出題した。どの程度書かれてくるか分からない。（後日，103 名提出を確認）

4.4.3. 4 月 23 日～5 月 28 日　③④⑤⑥⑦　生活科の 9 つの内容についての理解と実践例

前半を精選し，後半に実践をもっと入れたい。自己紹介カードが学生はあまり乗り気ではなかった。ワークシートは作業がスムーズに進み，よかった。「　」書きの具体的な子どもの姿がテキストの棒読みになってしまったので，いくつかを取り上げて前後の様子をもっと具体的に説明したい。動画は効果的であるが，もっと子どもの生き生きした活動を準備したい。

レポート課題の「今思えば」で平成 30 年度後期のレポートを紹介した。熱心に聞いていた。「子どもの頃の町探検」は記憶の差がかなりあった。1 回目の町探検を教科書の写真をもとに紹介したが，実際の写真を入手したい。2 回目のグループでの町探検の振り返りのカードを入れたい。

少し出席者が少なく感じた。ミニレポートの提出が 89 名だった。「けん玉」の活動に自主的に参加したのは一人であったが導入としては楽しく活動できた。具体的な動きのあるものを活動としてもう一つ導入したい。「季節探し」と「秋とあそぼう」の実践は具体的に話すことができたが，反応がよく分からない。振り返りシートを 10 行程度で書かせるのもいいかもしれない。

「⑨自分の成長」の説明が授業の姿で語ったために，イメージが難しかったかもしれない。次回に向けて，子どもの自分への気付きをもっと具体的に示した上で授業としての実践例につなぐようにしたい。「模擬授業」の例としてあげた実践が実際の授業の導入場面 5 分であったが、もっといろいろな発想を引き出すものにする必要があると感じた。

4.4.4. 6 月 4 日～6 月 11 日　⑧⑨　生活科の評価の在り方，学習指導案の作成と改善

ワイワイタイムで評価のイメージについて語らせた。評価の種類や方法について整理した後，生活科の評価に解説。「ほめどころをほめる」「加点的評価」「その子なりのよさ」等，イメージを持たせた上で，1 年単元「秋と仲良し」の単元及び評価規準や学習指導要領に示された評価を説明。説

活の特色の一つ「気付き」についても丁寧に説明できた。次回は，評価規準作成の演習も入れたい。

学習指導案の作成については，学生自身がほとんど作成したことがないということで，イメージを持たせることに苦労した。「思いや願いをもつ」→「活動や体験をする」→「感じる・考える」→「表現する・行為する」の学習過程に沿って，その特色について実践例を示しながら説明した。最後に，次回から始まる模擬授業について，その方法を示した。

4.4.5. 6 月 18 日～7 月 2 日　⑩⑪⑫　模擬授業と授業研究 1・2・3

3 時間にわたって模擬授業に挑戦させた。その手順は下記の通りである。

⑴　課題内容（内容項目を指定）を伝え，事前に個人で指導案（略案）を作成する。

⑵　4～5 人のグループに分かれ，その一部について 5 分程度模擬授業を実施。全員が授業後，グループでの省察を行い，全体での発表者を決める。

⑶　代表が修正した指導案に基づいた授業を 5 分程度行い，全体で 5 分程度感想を述べあう。

⑷　板書や教材の使用も自由とする。

模擬授業の内容は，第 10 回：内容①～③，第 11 回：内容④～⑥，第 12 回：内容⑦～⑨を指定し，第 13 回：振り返りを行った。

学生は，事前に自分なりの指導案を作成して参加した。3～5 人のグループで自分の計画を説明し合い，相互評価を行った後，グループの代表を選び，全体での発表に備えた。グループでの話し合いは，階段教室という環境のため模擬授業というよりまさに授業計画の説明に終わってしまった。全体での発表希望者を自主的に求めたところ，自ら模擬授業の実践を希望したのは 1 回目 1 名，2 回目 2 名，3 回目 2 名の計 5 名で，シラバス作成の過程で構想したこととは程遠い結果となった。

提出させた指導案を見ると，毎回，内容も多岐にわたり様々な活動を計画していたが，自分からみんなの前で模擬授業をすることはかなりハードルが高かったようである。後述するアンケートで，「抽選や指名で強制的にさせるべき」という意見もあったが，今回は自主性にこだわった。

4.4.6. 7 月 9 日　⑬　模擬授業の振り返りと指導計画の作成

3 回の指導案作成と模擬授業について，自己評価カードを使用して振り返り，グループごとにその成果と課題，今後，身に付けたいことなどについて話し合わせた。5 人の全体での授業者の動画を鑑賞した後，それぞれの授業者にコメントをさせた。経験した学生は，みんなとても緊張したがいい勉強になったと感想を述べていた。いかに自主的に挑戦させるかがカギになると感じた。

4.4.7. 7 月 16 日　⑭　幼児期の教育や総合的な学習の時間との関連について

幼児期の教育については，9 つの内容を説明する中で毎時間関連について話題にしてきた。スタートカリキュラムについても附属小の本年度の最新の取り組みを動画で紹介し，具体的なイメージが持てた。また，総合的な学習の時間については，その誕生の背景，目標・内容，実践例を扱った。筆者が喜界島で校長をした時代の「追い込み漁」の取組「我は海の子　小野津の子」について，カリキュラムづくりから実践，振り返りに至るまでの経過を紹介した。

4.4.8. 7 月 23 日　⑮　生活科の今後の研究の動向と実践的な研究の在り方・確認試験（総括）

最終回。確認試験と本講義のまとめの時間とした。1 回目と同じくらい，たくさんの学生が出席

した。持ち込み可としたが，昨年度の試験を受けた学生によると，持ち込んでもほとんど見る時間がないくらい忙しい試験だったと聞いていた。本試験も6問全てに回答できていない学生が受験者104名中，5名（5%）見られた。事前に準備をしておけばそれほど時間がかかる問題ではなかったと思うのだが，準備が足りないようだ。後半は，本講義のまとめを兼ねて，「移行措置」「学会の動き」「鹿児島県生活科・総合的学習研究協議会の活動」「これからの生活科研究の動向」等について説明をした。教員になったら生活科の実践にチャレンジしてほしいというメッセージは伝えられた。

5. 学生の受け止め～授業後のアンケートをもとに～

15時間の授業後，manaba（鹿児島大学学習管理システム）による学生へのアンケート調査を実施した。その内容と結果及び考察について以下に述べる。

- □　実施期間`　令和元年7月30日～8月9日
- □　実施方法　鹿児島大学学習管理システムによるアンケートへの任意の回答
- □　回答数　　授業登録者のうち，最終確認試験に出席した104名中71名（68.2%）
- □　回答方法　4択及び自由記述

5.1. 生活科教育の講義で「生活科のイメージを今まで以上にもつことができた。」（全員）

回答「とてもそう思う」70 %　「そう思う」30 %「あまり思わない」0 %「思わない」0 %

7割の学生に生活科のイメージを今まで以上に持たせることができたという結果は，はじめて授業を担当した筆者としては素直にうれしいことであるが，15時間もあったのに3割の学生には生活科のイメージを明確に持たせることができなかったことは素直に反省したい。

5.2. 「生活科にこんなイメージを持った。」（任意）

今回の授業でもった生活科のイメージを具体的に自由に記述してもらった。それらをいくつかに分類して，整理してみたい。まず，生活科の最も大切なイメージの「遊び」をあげたものが多かった。「遊び」を通して学ぶイメージをもってくれたようである。

- 遊びを学びに取り入れた教科（5）　・　子供が遊びの中で学びを深められる。
- 子供が主体であり，遊びの中から学習が生まれるもの　ほか

また，「活動」そのものをイメージとしたものも多く見られた。

- 楽しい（3）　・　楽しいワクワクするもの　・　子供たちにとって一番楽しい時間
- 楽しさに付随して学習が付いてくるようなイメージ　ほか

そして，「生活」の中での様々な「活動・体験」を通して学ぶというイメージも見られた。

- 子どもたちに様々な大切体験をさせていく中で新たな自分の発見をしていく。
- 生活に密着した教科　・　活動を通して学ぶ　・　日常生活の中の学び
- 一番，児童の日常生活に近い教科というイメージ　ほか

子供の「思いや願い」をもとに，「主体的」に学ぶというイメージが持てたこともすばらしい。

- 子供たち主体で，「やりたい」「楽しそう」を追及する教科
- 子供たちが中心にいて初めて成り立つ教科　・　子どもたちの「楽しい」を引き出す

・　子供の考えを活かす教科，活動の中に授業の意味を見出す教科　　ほか

また，3 学年以上の教科との「つながり」をイメージしたものも見られ，自然や社会とのかかわりがイメージされているものと考えられる。

・　理科と社会の基礎　　・　自然と触れ合う（2）　　・　動植物 理科 学校体験

・　社会や身近な町などについて学習する教科　　・　理科社会の前段階　　ほか

さらに，教科の特色を「幅広く」とらえたイメージを持った学生もいた。

・　低学年の心を育てる教科　　・　五感を使って学ぶもの

・　これからの人生に欠かせないことに時間をかけて学んでいく教科

「幼児教育とのとつながり」の視点からイメージを持っているものも見られた。

・　幼児教育と学校教育の架け橋といったポジションにあり，学問することの基本的な意義を体感するための教科　　・　幼児教育と小学校教育の架け橋になりうる

最後に，次の「生活科の本質」に迫る記述はたった一人ではあったが，今回の授業で考えるようになったとすれば素晴らしい。

・　今までは遊びに近い教科だというイメージしかなかったが,「子供がやりたいことを追求して，意欲的に学んでいく」というあらゆる教科を成り立たせるうえで最も必要な教科だというイメージ」に変わった。

そして，次のイメージは,「現職の教師に向けてのメッセージ」とでも言えるもので，教師になる学生であれば今後が楽しみである。

・　工夫次第で子供の関心や意欲、興味をいくらでも引き出せる教科

・　全ての教科の基礎となっていくもの

5.3.「生活科教育の講義は，生活科の目標・内容・指導方法についてよく理解できた。」（全員）

回答「とてもそう思う」54 %「そう思う」42 %「あまり思わない」4 %　「思わない」0 %

昨年度までのシラバスでは，生活科の目標について 1 時間，内容・指導方法について 9 つの内容を 9 時間，評価 1 時間の丁寧な指導が実施されてきていたが，模擬授業を導入するために今回は内容・指導方法については 1 時間に 2 つの内容を扱うこととした。96%の学生が「とても理解できた」「理解できた」と回答していることから，内容についての扱う時間を昨年度までの半分にしたことは大きな影響はなかったようで，少し安心した。

5.4.　「もっとくわしく学習してみたいことはどんなことですか。」（任意）

「もっとくわしく学習してみたいこと」を尋ねてみた。以下，その結果である。

・　生活科の授業実践について・・・10 人　・　生活科の授業参観・・・9 人　・　子供への対応・発達等について・・・7 人　・　生活科の内容について・・・5 人　・　生活科の指導方法について・・・4 人　・　生活科の誕生について・・・3 人

かなりの実践例を扱ったつもりであるが，もっと見てみたいというのは，実際の授業イメージが持てないということであり，授業参観をしたいという希望がそのことを物語っている。隣に附属小

があるという利点を生かして，15 時間の中で実際に学校に出かけて参観できないか，具体的な検討に入りたい。子どもへの対応・発達，指導方法については，別の時間を設けないと時間が取れない。

5.5. 生活科教育の模擬授業について

「生活科の指導案づくりはとても難しかった。」

回答「とてもそう思う」39 %　「そう思う」49 %「あまり思わない」11 %「思わない」0 %

「生活科の模擬授業をみんなの前でするのは恥ずかしかった。」

回答「とてもそう思う」42 %「そう思う」46 %「あまり思わない」10 %「思わない」2 %

生活科の指導案づくりの難しさについて，88%の学生が「とてもそう思う」「そう思う」の回答でであった。また，模擬授業の恥ずかしさについては 88%が肯定的な回答をした。この講義の開講期が第 3 期以降としたため，新 2 年生から 4 年生までの学生が受講しており，2 年生は指導案作成が初めてという学生も多かったと思われる。3 年生についても前期の講義は第一免許の教育実習前の講義ということで他の科教育の講義で指導案作成を経験した学生はなんとか作成したものの，その経験のないまたは少ない学生については手ごたえがあったに違いない。30 年以上前のことであるが，附属小で担当した教育実習生がそれなりに指導案の作成ができていたという記憶があり，今回の結果は驚いている。このことは，今回の課程認定で全教科教育で模擬授業が取り入れられていることとも因果関係がありそうであるため，学部全体での具体的な検討が必要であると考える。

今後，生活科教育における指導案づくりのスモールステップ化と模擬授業のやり方の工夫を加えるとともに，学部の教職課程全体のカリキュラムの中で，指導案づくりや模擬授業の力をどう高めていくかを検討してみる必要があると考える。

5.6. 「生活科教育の授業を受けて，学んだことや考えたこと等，書いてください。」（任意）

授業をしていても学生がどのようなことを学んだかをとらえることはなかなか難しい。「授業で学んだことや考えたこと」を自由記述させることにより学生が確かに学んでいることに気付かされた。

・　先生の指導案通りの授業が展開されることが目的ではなく，どんな場面でも子供が授業の主役であるべきなのだと強く思った。　・　他の授業は理屈や方法論など説明ばかりでイメージが分からなかったり，あまり響くものがないなあと感じるものが多いが，生活科教育はとても現場のことがよく分かった。　・　まずは子供の安全が守れる範囲内で子供の思うままに活動させてみることが子供の積極的な学びにつながると思った。　・　生活科の内容理解がかなり深くできたのではないかと思います。ここまで丁寧に内容を扱う授業はこれまでなかったので、勉強になりました。　ほか

6. 今後の生活科教育の授業について

6.1. 「今後，この生活科教育の授業でこんなことをしたら，もっと楽しい授業になるだろうなというアイデアがあったら，記入してください。」（任意）

・　実際の授業の見学。実際の授業を見に行くと，より生活科の指導のイメージが湧きやすい。

・　実際の生活科が学校でどんな風に行われているか，いくつか見たがもっと見たい。　ほか

授業では，附属小をはじめ，いろいろな実践の写真や動画を使用して生活科のイメージづくりに努めたが，直接体験を信条とする生活科こそ，実際の授業参観が大切である。

・　子供たちと触れ合う。　・　子供たちと一緒に探検したり遊んだりする。　・　子供たちを迎えて遊ぶ。　・　子供たちを迎えて遊んだり活動したり、おもちゃ作りをする。　ほか

授業参観とともに，子供自身と遊んだり活動したりしたいという欲求が強いと改めて感じた。

この授業までに，もっと子供と遊ぶ場面が必要であろう。1 年生で学校に出かける実習をしているが，子供との触れ合いをもっともっと時間をとる必要がありそうだ。生活科教育の授業でも工夫できないものであろうか。

・　けん玉大会をする。　・　子供たちと学生の合同グループをつくり，一緒に活動する。遊びを企画する。　・　実際に身の回りの材料で作る簡単なおもちゃを作ってみる。　ほか

6.2. 今後の生活科教育の授業の改善策

・　100 名を超える学生の中で，模擬授業をもっと効果的に実施する方法を検討したい。長期的には，授業を 2 クラスに分け，50 名程度の人数でできないか相談したい。

・　授業参観の要望が強いので，15 回の中で 45 分の参観ができないか，附属小と協議したい。

・　指導案作成が初めての学生のために，作成の手引きや共同作成等の具体策をとりたい。

・　生活科教育の時間だけでは，教材づくりや子供の発達研究は十分にできないので，他の講義とのカリキュラム・マネジメントをさらに進める必要がある。

7. おわりに

初めて大学の教科教育を担当し，大学における教職課程のこれまでの取組について自分なりに整理するとともに，15 時間の自身の授業の省察を通してその実践と課題について検討してきた。

10 月からは後期の授業が始まる。すぐに対応できることは積極的に取り入れるとともに，来年度以降に変更していく必要のあることについても積極的に検討していきたいと考える。

8. 謝辞

これまで本学の生活科教育の充実に寄与されて来られた先輩諸氏に敬意を表するとともに，授業アンケートに答えてくれた学生諸君と，情報提供をいただいた関係各位に感謝したい。

【引用・参考文献】

⑴　木村吉彦（2005）「大学における生活科授業の在り方について～実践力のある教員を要請するための『生活科指導法』の探求」（教員養成学研究　創刊号，上越教育大学）

⑵　野田敦敬（2019）「生活科・総合で大切にしたい子どもの思いや願い」（日本生活科・総合的学習教育学会，生活科・総合の実践ブックレット第 13 号）　p. 3

⑶　小柳正司・八田明夫編著（2013）「生活科・総合的学習の新展開～「生きる力」を育むために～」（あいり出版）p. 1～2